Osaka University Knowledge Archive

Title	ディスコースポライトネスの観点から見る相互行為の変容
Author(s)	谷, 智子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59887
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	谷（たに）　智（とも）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２５５８８　号
学位授与年月日	平成24年６月26日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化専攻
学　位　論　文　名	**ディスコースポライトネスの観点から見る相互行為の変容**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　三牧　陽子 （副査） 教　授　森　　祐司　　准教授　山下　　仁

論　文　内　容　の　要　旨

本研究はダイナミックな人々の配慮の様相を捉えることを目的としたポライトネスの実証研究である。ポライトネスに関する先行研究の多くは、「初対面会話」や「親しい友人同士の会話」などある特定の人間関係の一部の会話を切り取って分析している。本論では、よりダイナミックなポライトネスの実態を明らかにすべく、ある特定のペアが初対面から８回対面を重ねるという人間関係の変化が想定されるような会話データを収集し、分析を行った。調査対象としたのは、日本語母語話者の女性同士、２者間の会話である。

分析に際して、ポライトネス研究で最も包括的であるとされてきているBrown & Levinson(1987、以下B&L)の理論を中心に据えつつ、近年、多くの議論がなされているディスコースレベルでポライトネスを見る視点を取り入れた。ディスコースポライトネス理論を提唱した宇佐美(2001)は、B&L理論で示されている一発話行為や短いやりとりから、更に視野を広げて、より広範囲で観察されるポライトネスを捉える重要性を主張している。彼女の理論で重要視されているのが、ある談話において存在して当然である行為が見られる無標の状態である「デフォルト」という概念である。デフォルトと、デフォルトからの逸脱をみることで、ポライトネスのダイナミズムを示そうとしている。

本研究でもディスコースレベルでポライトネスを考察するにあたり、このデフォルトという概念について検討した。これまではディスコースレベルのポライトネスの観点、特にデフォルトに関して実証的な研究がなされることは少なかった。また、理論研究では、社会的な規範と解釈できる要素がデフォルトとしてみなされていた。一方、本論は、デフォルトには社会規範的な要素に加え、ある特定の個人間に特有の性質を持つ要素も含まれ、後者は相互行為が行われる中で構築されていくものであるという仮説を立て、ほぼ同条件下で収集した３ペアの会話もとに、それを実証していくこととした。これまでのデフォルトに関する実証研究では、文末の、「です、ます」の使用、不使用という文末スピーチレベルのみが注目されてきた。しかし、文末スピーチレベルは、日本語においてはかなり社会的な規範に縛られる要素であると考えられ、参与者間の関係によっては文末スピーチレベルの変化が見られない場合も予想され、静的にしかポライトネスを捉えられない可能性がある。そこで、コミュニケーションの内容面を考察することができ、より個人間で柔軟に操作され、ダイナミックな配慮の実態が見られると考えられる「話題」にも注目した。また、デフォルトに加え、B&L で提示されているよりも長い発話連鎖におけるポライトネスストラテジーについても考察を行った。これまでの先行研究で実証的には示されることが少なかったディスコースレベルで捉えなければ見いだせないポライトネスの様相を示したことが本研究の意義である。

分析結果は以下の通りである。まず、第４章で、文末スピーチレベルに着目してデフォルトに関する分析を行った。３ペア中１ペアは、最初は丁寧体がデフォルトであり、４回目以降は普通体がデフォルトとなった。１回目から３回目で、回を重ねるごとに丁寧体の選択比率が徐々に減少するのではなく、その比率の揺れ動きを見せながら共通性の模索が行われ、４回目以降、普通体がデフォルトとなった。このように、会話参加者間で文末スピーチレベルの選択にまつわる調整を行いながら、デフォルトが相互行為的に構築される様子がうかがえた。

一方、残りの２ペアは、初回から全対面を通してデフォルトが普通体であり、その揺れ動きは見られず、相互行為的に構築されるデフォルトというものを観察することはできなかった。

次に、第５章では話題に注目し、話題の種類および話題内の相互行為について分析した。その結果、３ペア全てにおいて、８回の対面のうちの初期段階で、共通性の模索、確認、調整等が行われ、その後ある程度長い期間安定して維持されるそのペア独自の特徴が見られるデフォルトが構築されることが明らかになった。例えば、あるペアは、初対面から３回目の会話の中で共通性の模索と確認がなされ、その後の対面では共通性の確認できた話題を繰り返し選択すること、その話題内の相互行為において共通性を強調する形で会話を進めるということがデフォルトとなっていた。また、別のペアは、会話参加者間で特定の話題が許容されない場面があり、その話題内でフェイス侵害行為が見られた。その後に、参与者が巧みにポライトネスを操作することにより話題を両者において許容されるものとするという過程を経て、その類の話題は繰り返し導入されるようになり、会話がスムーズに進むようになった。ここから、一旦両者間でデフォルトではなかった選択話題が、フェイス補償行為の連鎖によりデフォルト化されたといえる。このように、デフォルト構築過程における相互行為や、相互行為的に構築されたデフォルトの質はそれぞれのペアにおいて異なっていた。

以上のように、文末スピーチレベル、話題の分析を経て、相互行為を重ねることにより、ペアごとに独自の特徴が見られるデフォルトの構築が観察された。

３ペア中１ペアは、８回目の会話において選択話題が大きく変化していた。フォローアップインタビューにより、会話参加者の１人がそれまでなされてきた相互行為に違和感を持ち始めていたことが分かった。このような参与者の心理面の変化等により、相互行為的に構築されたデフォルトが再び変化を遂げる可能性もあるということも主張できる。

また、デフォルトを考察するにあたり、これまで実証的に示されてきた文末スピーチレベルに加え、話題も分析対象としたことにより、個人間で調整され構築されるデフォルトの実態をより詳細に示すことができた。デフォルトは、さまざまな談話の要素の集合体であると考えられ、話題もデフォルトについて考えるにあたって重要な要素の１つであるということも分析を通して明らかになった。

第６章では、B&L で提示されているよりも長い発話連鎖にも、会話参加者の巧みな配慮行動が見られるという前提のもとで、ディスコースレベルのポライトネスストラテジーについて考察を行った。その際に、B&L で重きを置かれている話し手の視点に加え、ある特定の行為が聞き手にもたらす効果についても論じた。初対面から対面を重ねるごとに、会話参加者はFTA危険度の高い行為を遂行するようになる。この類の行為が出現するのは距離が接近したと会話参加者により認識されていることが一因であると思われるが、会話参加者間で心的距離感覚が一致していない場合もあるだろう。また、たとえそれが一致していたとしても新たに導入される行為が両者間で許容され得るものかどうかは明確ではなく、導入の方法や時期などによってはFTAとなる可能性も秘めている。ゆえに、会話参加者はさまざまに調整を行い、ポライトネスを操作しながら会話を展開していた。

まず、ポジティブポライトネスとしての意図があると考えられる行為にまつわる発話連鎖に注目した。これらに共通している点は、ポジティブポライトネスとして効果をもたらそうとしていることから、共通基盤を強調することや、同等の立場に立とうとする行為が含まれていることである。また、ポジティブポライトネスとして意図としているものの、FTA 危険度の高い行為であることから、一連の会話の展開の中でネガティブフェイスへの配慮も適宜行っていることも分かった。このような発話連鎖を本論では「ポジティブポライトネス指向調整ストラテジー」とした。

一方、上述のようなポジティブポライトネスとしての意図はない発話連鎖も見られた。このような発話は少数しか確認できなかったが、そのうちアドバイス行為を取り上げて分析を行った。結果として、アドバイス行為の遂行後に徐々に相手に対する負荷の度合いを減少させるべく、ネガティブポライトネスを追加していくという配慮がなされていた。ある程度距離が接近したと考えられる関係であっても、積極的に働きかけるのではなく、相手と距離をおくことで円滑にコミュニケーションを行おうとしていることが伺えた。このような一連の発話の連鎖を、「ネガティブポライトネス指向調整ストラテジー」と名づけた。

以上のように、本論では、デフォルトについて詳細に示したと同時に、ディスコースレベルのストラテジーを提示した。実際のデータに基づく分析により、人々が場面や関係に応じてさまざまに操作するダイナミックなポライトネスの様相を実証することができた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、初対面から半年間にわたって対面を重ねた会話データをもとに、相互行為の変容を通してポライト

ネスのダイナミックな様相を考察した実証研究である。Brown & Levinson(1987)をはじめとした従来のポライトネス理論研究が一発話行為や短いやりとりを対象にしていることに対し、近年では、より広範囲にディスコースレベルで観察されるポライトネスを捉える重要性が主張されている（宇佐美2001等）。それらディスコースレベルでポライトネスを捉える観点を持つこと自体は広く合意されているものの、実際にディスコース全体を分析対象とした実証研究はほとんどなされていない。そのため、単一の会話全体だけでなく、さらに半年間にわたって収集した会話にまで拡大して、よりダイナミックなポライトネスのあり方を研究対象とした本研究は、意欲的、かつユニークと言える。用いられたデータは、年齢や出身等もほぼ同等に設定された、同一大学院新入生の日本語母語話者女性ペアによる半年間各８回分の会話、計３ペア分であり、定期的に設定された場での自由会話データとフォローアップインタビュー等が収集、分析された。

ダイナミックなポライトネスの様相を捉えるために注目したのは、ある談話において存在して当然の無標の状態を指す「デフォルト」概念（宇佐美 2001）である。ディスコースレベルのポライトネスを検討するために従来から注目されることの多いスピーチレベルに加えて、本研究では話題の観点からもデフォルトとデフォルトからの逸脱を詳細に分析したところに新規さが見られる。話題の種類および話題内での相互行為の分析からは、３ペアに共通して、８回の対面のうちの初期段階で共通性の模索、確認、調整が行われ、その後ある程度長い期間安定して維持されるそのペア独自の特徴的なデフォルトが構築されること、また、いったん安定したデフォルトも、参加者の心理面の変化等により変化を遂げる可能性もあるということ、デフォルト構築過程における相互行為や相互行為的に構築されたデフォルトの様相はペアごとに異なった個別性の高いものであること等、興味深い知見を数多く指摘することに成功している。

さらに、初対面から対面を重ねるに従い、FTA 危険度の高い行為も出現するようになることに注目し、FTA を遂行する際の発話連鎖をディスコースレベルで詳細に分析した。その結果、会話参加者間で心的距離感覚が一致していない場合や、新たに導入される行為が両者間で許容され得るものかどうか明確でない場合には、会話参加者がさまざまに調整を行い、ポライトネスを操作しながら会話を展開している様子が観察された。そこで、FTA 遂行に至るまで、および FTA 遂行後の、より長いスパンの発話連鎖の詳細な分析に基づき、「ポジティブポライトネス指向調整ストラテジー」および「ネガティブポライトネス指向調整ストラテジー」と名づけたディスコースレベルのポライトネスストラテジーが提案されている。

このように、従来にない規模で遂行されたディスコースレベルでのポライトネス実証研究である本論文が、ミクロな発話連鎖、および、全８回の会話全体を見据えたマクロな視点という双方からダイナミックなポライトネスの様相を実証的に明らかにした功績は、高く評価できる。

データの豊富さを分析に十分活かし切れていない部分も一部見られるが、それは今後の課題であると言えよう。以上から、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。